

# 朝鮮戦争の起源についての一考察(一)

西尾昭  
張君三

- 一 はじめに
- 二 朝鮮戦争起源論
- 三 朝鮮戦争に至るまでの経緯——ソ連外務省保管の秘密文書にもとづき——
- 四 開戦への状況づくり
- 五 戦争の準備 (以上本号)
- 六 実戦向けの人民軍の配置 (以下次号)
- 七 金日成の使者、中国訪問
- 八 金日成、南侵を明言
- 九 スターリンからの返事
- 一〇 中国の動き
- 一一 終わりに

## 一 はじめに

本稿は今から丁度半世紀まえ、一九五〇年六月二五日に勃発した朝鮮戦争の起源についての論究である。

なかんずく、その戦端が開かれるまでの経緯及びその主役の動きに重点をおいて考察したものであるが、この戦争ほど現代朝鮮史の中で理不尽でかつ不可解な事件はない。我々は今まで世界歴史上の様々な出来事の中から、内容が入り乱れかつ複雑怪奇なためにその真相を明らかにできない多くの場合を見て来ているが、朝鮮戦争の場合は性格上割合原因も結果もはっきりしているので、この限りではない。確かに戦争勃発当初は、社会主義国家特有のプロパガンダに惑わされ、実情を知ることが困難であった。それが戦争が経過するなかで大凡その全容が見えだし、当初は国内政治の諸矛盾の結果する内戦性格を帯びたものから中共の介入後は国際戦に発展したことが判明する。

化石化寸前のこの戦争は、直截簡明に言えば、朝鮮全体を巻き込んで、戦端を開いたのは金日成で、戦後の冷戦構造の実験を朝鮮人同士が行った、言わば『米ソの代理戦争』である。

当時朝鮮半島に住む人々が、金日成の大義名分がどうであれ、この戦争によって甚大な被害を蒙り、塗炭の苦しみのなかで生きて来たが、日本の『進歩史観』の一部識者の『人道主義に満ちた』彼らの歴史感覚は、社会主義的陣営を正義とするという姿が見え、とりわけ、朝鮮半島問題における北朝鮮の立場に対しては、理性的判断を欠いてまで正当性を貫こうとする不条理が際立っていた。

卑近な例を挙げると、朝鮮戦争観にしろ、日本で一時流行した北朝鮮に対する地上天国論にしろしかりで、そのため犠牲になった無垢の民衆に対してなんら責任意識も感じていない。これは偏に社会主義に対する憧憬並びに同情が、誤った歴史意識を産んだ所産だろうか、『アメリカ帝国主義』に対する抵抗意識が発展して、アメリカ寄りの韓国を敵視し、当然のこのように韓国の北進説を強調した。つまりこれは無理を通して道理を凹ませる左翼論理というもので、実に不道德極まりない。

このような不謹慎な彼らの歴史観に対して、真実の原資料を探索し、朝鮮戦争の真相究明したい、と常々念願して来たが、ソウルから朝鮮戦争に関する好資料発見の報に接し、数日後の入手資料の表面を見ると『ロシア外務省 外交政策文書保管所・六、二五戦争関連補充文献資料（約二四六頁）』と記してあり、また、もう一冊にも『ロシア連邦大統領文書保管所とロシア外務部外交政策文書保管所により金泳三大韓民国大統領に一九九四年六月二日に手渡された一九五〇年—一九五三年韓国戦争に関する補充文献資料複写目録（二六九頁の二一六文献）』及び『ロシア連邦大統領文書保管所と外務部外交政策文献保管所により金泳三大韓民国大統領に一九九四年六月二日に手渡された一九五〇年—一九五三年間の韓国戦争に関する基本文献資料複写目録（二〇〇件二七九頁）』などと、ロシア政府が正式に資料を公開していることがと記されている。この文書は一九九三年二月四日にロシアでは既に公開され、暇と金と熱意さえあれば、だれにでも入手が可能である。なお、このことについては、一九九四年七月二日の東京読売新聞の外電が既に『朝鮮戦争のロシア内部資料を韓国に公開、毛沢東、スターリン開戦事前承知の裏付け』というなどの形式で報道している。

以上が資料入手までの過程における顛末であり、本稿はこれに基づいて作成されたが、絶対秘密だと了解の上で行われる会話の迫力、政治家としての人間性などが感じられ、真実まがいの陰謀がかくも見事に為されるものだと感知した。しかし、これはねじ曲げようにもねじ曲げようのない完璧なまでにまとまった『スターリン・金日成・毛沢東』のトライラテラルな関係を如実に示す暗号文書である、と確信されるのである。

ちなみに、なぜか韓国においてこの資料を駆使した朝鮮戦争の真相究明作業がまだ進められていないようだ。国情に鑑み徒に北朝鮮を刺激したくないという大韓民国政府の配慮が底辺に働いているのかもしれないが、もし事実なら、情報公開が進む世界趨勢に逆行する愚行と言わざるを得ない。もはや休戦して五〇年が経った。南北の政治家は朝鮮民族が当然知る権利のある歴史の真実を隠してまで小さな僥倖を期待し、その結果に満足しようとしているかも知れないが、それは将来に禍根を残すことになろう。

朝鮮戦争を実体験した世代がますます減って来ている現状に鑑み、先代のやった過ちを後代が繰り返さないために遅まきながら今その作業に着手しなければならない、と思うからである。

ところで、朝鮮戦争は、次の意味で特徴がある。

内戦なのか、それとも国際戦なのか、戦端を開いたのはだれか、そして簡単に片付くはずの戦争が、どうして長引いたか最後にどうして勝者がいないのか、などの点である。これを明確にせずには朝鮮戦争論を展開して見たとて、明確な解答が得られるはずがない。確かにこの戦争が拡大するまでに地域的な、南北朝鮮は軍警による揉め事や紛争程度のものはあった。しかし、外国の力を借りて自己政権の固めや朝鮮の赤化による独裁体制を構築する目的で近代兵器

を駆使して空中戦による大量破壊や殺戮、又は戦車部隊の出現というスケールの戦争を始めたのは、紛れも無く当時北朝鮮の首相・金日成である。当時の日本ではこの戦争に対して、つぎに見るように妙に持って回った言い方をしてきた。「戦争を始めたのは南の李承晩の軍隊である、かれらはアメリカに唆され、朝鮮民衆がせっかく作り上げた自主的で民主的な社会主義国家をつぶそうと、南朝鮮の軍隊が北朝鮮を攻めた」、という論理がそれである。こんな未成熟的な歴史観が戦後日本の社会では『民主・進歩』思想として流行し、また最近の韓国でも良心的歴史観と持て囃され、保守で右翼の自由主義思想は反動であるとする思潮が流れていた。要は原因がはっきりすれば、結果も自ずと判明するものである。この戦争の発生当初から極東地域を担当した『帝国主義国家・アメリカ』のGHQのG-2情報などは、完全に無視され、日本では五〇年六月一七日のダレス國務省顧問の三八度線視察情況の、幼稚な写真をもって米韓共謀による北進説を優先させていたのである。しかし、冷静に考えれば分かることだが、南北の朝鮮を分断しておいた米ソがじっとしているはずがない。表面上米ソがそれぞれに南北朝鮮から軍隊を引き揚げてはいても、朝鮮半島での支配権を諦めた訳ではなく、むしろ、その強化の努め、相互がスパイ合戦を展開していた、と見るのが順当な見方であって、実際そうであった。事実、米軍引き上げ後にも韓国にはKLO (Korean Liaison Office 韓国連絡事務所) があって、その関連機関に Cannon というスパイ組織が情報収集を担当していた。その上部組織には、東京のGHQのG-2のウイロビー少将がおり、ソ連軍引き上げ後の北朝鮮情況について報告を受けていて、そうした活動の結果をワシントン行政政府に報告していた。

## 二 朝鮮戦争起源論

これについては、①第一説、②第二説、③第三説に分類し、それぞれに代表的意見を披露して見る。

### ① 北朝鮮侵略説

イ ラスク氏の場合

代表的人物として、当時アメリカの國務省次官補であったディーンラスク氏の話を紹介する。彼によれば、『……ソビエトが北にやらせた。朝鮮戦争は戦後アメリカ人の世界観にとってある意味で分岐点であった。ベルリン封鎖なども然ることながら、米人が中ソの率いる共産勢力との長期的戦闘に直面しているのだと、直感した』<sup>(1)</sup>という。

ロ 金三奎氏の場合

同氏は東京大学を卒業後に祖国に帰りソウル大学で教鞭を取るが、志あって東亜日報社に転職する。朝鮮戦争勃発当時はソウルにあって、実体験する。再度の渡日後、コリア評論社を創設し、長年にわたって朝鮮統一問題を研究した。南北何れの風に吹かれることなく独自の統一論を展開した人物で、特に朝鮮戦争に関する見解を次のように披露した。『北が先にやったのは間違いない。米ソなしには政権維持が不可能な脆弱な政体であった。金日成が南を攻めたとすればスターリンの許可なしには不可、金日成が火付け役を果たすにはスターリンがその背後にいたはずだ。』<sup>(2)</sup>

## ハ 神谷不二教授の場合

『ソ連の東欧における衛星国化の進行と同時にアジアにおける衛星国家として北朝鮮に大使館を設置、ソ連式の法律、経済、軍事、文化などを伝播させ、北朝鮮の民族保衛省（その長に崔庸健・筆者）にはソ連人軍事顧問を置いた。……ヤク、ミグなどの戦闘機やT-34タンクなどが示すように兵器はソ連製であった。ソ連は強大な支配力を奮い、こんな状況の中で金日成が単独で采配を振ることは不可能で、一九五〇年六月二五日の開戦決定も恐らくはソ連の助言ないし勧告を得たうえでの決定であろう。言い換えれば、北朝鮮がリードをとった形式で実質的にはソ連との共同決定に近いものではなかったか、と推定する。これに比べ中国の朝鮮に対する影響力ははるかに小さかった<sup>(31)</sup>。今にしてさらに可成の説得力の感じられる説である。これから紹介するソ連外務省に保管していた暗号文書を見ても、この事実が裏付けられ、金日成は一九四九年三月五日にモスクワの地でスターリンに会っている。しかし、神谷説が出た当時は、左翼系の識者、特に北朝鮮系のシンパ学生及びその識者には右傾化発想による暴論として見做され、北の侵攻説の披露は即ちスズメ蜂の巣を突くような喧噪を覚悟しなければならなかった筈である。

## ニ 高坂正堯氏の場合

日本の合理的現実主義者とされる京都大学教授・高坂正堯氏は、朝鮮戦争は性格上『米ソ代理戦争』だと断定し、その起源を『北朝鮮軍が三八度線を越えて武力南侵してことで始まった』と前提し、『その行為は計画的に調整された意図的なものであったし、ソ連の事前承認と援助なしには不可能』と指摘、そのソ連の意図についてつぎのように分析している。

- (1) ベルリンの失敗による威信を朝鮮半島で取り返そうとした
  - (2) アメリカの対日早期講和によつた獲得した日本基地確保に対抗する措置
  - (3) 一九四九年六月米軍の韓国からの撤退は韓国を重要しない証拠
  - (4) 米軍が韓国戦に参加すれば、米の国力が分散する
  - (5) 中国が朝鮮戦争に参加すれば中国の国力も分散する
  - (6) (4)及び(5)の状況が生じれば米中関係は緊張し、ソ連は優位に立<sup>(312)</sup>てる。
- 具体的な資料がなく、様々な憶測のなかで同戦争に関する資料は乱れ飛び、推測の域を脱しなかつた時代の見解である。同氏は論理的にはつきりと北朝鮮がやったと断定している。日本ではこんなに理路整然とした論理が右翼的発想と軽視され、あまり重要視しない傾向がまだにある。

## ② 韓国北進説

これは北朝鮮の公式見解とその支流に与する歴史観を有する日本の朝鮮研究所の畑田重夫、藤島宇大などは、五〇年六月一八日のダレス戦線視察をもつて朝鮮戦争を始めたという説を唱えていた。

### イ. 北朝鮮の公式見解

『アメリカは一九五〇年六月二五日かれらの手先李承晩一味をそそのかして朝鮮民主主義人民共和国に対する武力攻撃を開始させ……共和国政府は……戦争行為の即時中止を求め……その責任は重大であることを警告し、……朝鮮



人民の運命を担っている朝鮮労働党と共和国政府は事情対策を講じるべくして……六・二五党中央委員会政治委員会はこの重大事態について討議し……断固たる対策を取るべく朝鮮民主主義人民共和国軍隊三師団四旅団の約一〇万兵力を南に派遣した<sup>(4)</sup>と主張する。しかし、筆者は不思議なことに気づいた。北朝鮮がここに上げた兵力の数字や師団数などは、五〇年六月二五日現在南侵時の北朝鮮人民軍の数と一致するのである。皮肉な見方では、北朝鮮が先に行ったと告白しているようにも思える。幼稚な話である。いくら戦争好きでも一朝一夕に一〇万の兵力を集めることができるだろうか。これは事実とは反する捏造である。北朝鮮は南朝鮮を攻めるための臨戦体制が生まれ、装備もソ連から送られていたし、また一九四九年一月ころにはソ連と北朝鮮間で清津港に軍港を構築すべく議定書（政治局記事録第一四項…特別ファイル 非公開の印あり）も交わしている。また、軍事物資がソ連から手渡される日も、一九四九年九月一五日と決まっていたし、当時のソ連大使・スチコフも一九四九年一月二七日から三度も『三八度線の防御状況について』の中で本国政府にそう報告している。これらのことは後に列挙される資料の中で篤とご覧になれる。

ロ・畑田重夫氏の場合

「六・一八ダレスの在『韓』アメリカ軍事顧問団とかいらい軍高官たちを帯同して三八度線一帯を視察し……塹壕の中で『北伐』の作戦計画を最終的に検討した。……ダレスは李承晩一派に六月二五日を期して戦争を開始するように指示しながら『北鮮から先に侵入して来た」と逆宣伝すると同時に北鮮に攻撃を開始せよ……<sup>(5)</sup>と主張する。北朝鮮の論理と並ぶ実に稚拙なものである。塹壕の中で協議する必要などない。立派な計画ならば、当時

ソウルには半島ホテルもあったし、それが政府レベルの大事な会議であったならば、たとえ秘密を要する内容であったとしても公的建物の中で堂々とやればいい。もっとも重要なことだが、当時一介の國務省顧問の資格でのダレスは、当時韓国政府に対して命令できる立場にはなかった。

#### ハ・元北朝鮮の高官の場合

「……開戦の翌日の六・二六に金日成首相は放送を通じての演説で、『売国奴・李承晩かいらい政府の軍隊は六月二五日に三八度線の全域にわたって共和国地域に対する全面的な攻撃を開始した、勇敢な共和国警備隊は敵の侵攻に反撃を加え……李承晩軍の攻撃を打ち砕いた』と述べ、『李一味による支配とアメリカ帝国主義の圧政に苦しむ南の人民を解放するために戦争を遂行した』<sup>(6)</sup>と主張した。

これは階級闘争の一環として朝鮮戦争を見ようと、背伸びした立場を取っているであろう。北朝鮮の所謂『社会主義原則の朝鮮労働党の指導の下に馳せ参じた知識階級の闘争』としての戦争である、<sup>(7)</sup>というのである。

#### 二・崔章集氏の場合

彼は高麗大学の政治学教授であったが、金大中現政府の出帆と同時に大統領諮問政策企画委員会の委員長となった。月刊朝鮮(九八年一一号)によれば、かれは『六・二五朝鮮動乱』は、金日成の歴史的決断であった、と断定している。以下は、月刊朝鮮の記事に従う。

「金日成は国内の民衆的支持基盤、多様な政治勢力からの、対南(南向けの)強硬政策に対する政治的・物質的・精神的・道徳的支援、中国共産党の勝利による社会主義革命に対する自信感などすべての対内外的条件などが

圧倒的に優勢であった。その優勢に対する過度の自信が彼を戦争を通じた総体的勝利という誘惑にがんじがらめになり、結局全面戦争という決断を下した。<sup>(8)</sup>」

この論理には事実曲解がある。

金日成の国内基盤の優勢とは、北朝鮮領域に限るべきであって、関わりのない南まで一般化できない。政治的意図が奈辺にあらうと、全面的支援と書かずにソ連からの軍事物資の援助とはっきり書くべきである。それにしても金日成に対する過度な歴史的評価のあまり、かれに対する史観の判断を誤っている。

「開戦初期の韓国戦争は、民族解放戦争であったが、国際戦に転換したのは北上開始後であった……戦争初期には夥しい数の人々が義勇軍として人民軍に加担するか好意を示した者が多くいた。……朝鮮戦争の引き金はだれが引いたか、の中心なる関心は、一九五〇年六月二五日明け方全戦線にわたって南侵を敢行した北韓（北朝鮮）に戦争のすべての責任があるという論理にある。この論理はこの戦争がスターリンの指揮下に準備され、毛沢東の支援の下に金日成が挑発したという論理である。このような冷戦・反共モラリスティックな接近は第二次世界大戦以後アメリカのヘゲモニを正当化し、南朝鮮の単独政府のレゾン・テートルを支える論理であると言えよう……」<sup>(9)</sup>

一見ご立派な論理のように見えるが、金日成の弁護で自家撞着している。

義勇軍のことを、同氏は知らないらしいが、これは北側が南の占領地域において強制的にやったのであって、大半の者は北朝鮮の政策に賛同して義勇軍を志望したのではない。また、同戦争がどうして民族解放戦争なのか、朝鮮民族がスターリンの支配下に入ることが民族の解放になるのか。また、単独政府樹立を南が先にやったというが、事実

上は北朝鮮が先にやった。南は少なくとも国際社会の一員としての手続きを踏んで政府樹立を宣言したのが、北朝鮮の一九四八年九月九日の正式樹立宣言に先立った同年の八月一五日である。この事実は認めるが、金日成には統一後の南北政治状況に配慮するほどの余裕があったろうか？ 自己地盤の固めることに奔走していたし、ソ連の支えがあるうちに北朝鮮の第一人者としてソ連からの認知を得、またその事実を社会主義兄弟国へ告知する必要もあつた。その証拠に彼は北朝鮮臨時人民委員会委員長の名において、一二大綱領の発表、三月五日には土地改革法の制定などをもって人民政権の社会的基盤の強化を図つた。<sup>(10)</sup> 正式に樹立を宣言するまでの法・政令の制定の数は無慮四七〇から五〇〇に上るが、南と協議して統一する気のある者ならやらなかつただらう。<sup>(11)</sup>

### ③ 内 戦 説

この論理は朝鮮戦争の引き金を誰が引いたかが問題ではなく、南北の政権を担当した李承晩及び金日成にその侵略の可能性が十分にあり、両者とも条件次第では随時戦争へ突入する危険が十分に孕んでいた、従つてあくまでも内戦だといふ説。<sup>(12)</sup> その代表はブルス・カミンスである。

#### イ・ブルス・カミンスの場合

先にも少し触れたが、ブルス・カミンスによれば、日本の支配体制から解放された朝鮮は、海外から抗日独立運動に関わつた多くの人士が帰国したが国内では既に保守派が実権を握つていて、世は正に日本時代への逆戻りの感があつた、帰国した彼らの多くの者の場合、住み着く場所さえなく、加えて大衆運動のレベルで人民の心を捕らえてい

たのは左翼であった、……そうした状況の中で時代は進み、四八年から五〇年にかけて農地改革や都市の労働条件の改善を求めて始まった人民の大衆運動がゲリラ戦争に発展し、それが五〇年代になって大規模な戦争になった、言わば、五〇年六月二五日は、朝鮮戦争の始まりというよりも、過去五年間の内紛の総決算だという訳である。<sup>(13)</sup>

一見歴史を総合的に理解したうえでの説得力のある分析のように見える。しかし、実に皮相的で粗削りな解放当時の歴史分析であるために、錯綜とした当時の状況を深く掘り下げることができずにいる。まず、孤軍奮闘で頑張ってきた独立運動家に対する待遇の面での話だが、米ソを背にして登場して来た李承晩・金日成などの勢力が大半を占め、かれらによって抑圧されていた状況は、南北とも変わりはない。かれの言う『帰国した多くの知識人』とは、どういう階層の人間を指すのか良く分からないが、あったとしてもカミンスの言う知識人とは多分に呂運亨の率いる朝鮮共和国関係者のことを指すものと思われる。筆者の見解では国家経綸を語るには思想的に片寄っていてなおかつ役不足でもあった。卑近な例に朴憲永の率いる朝鮮共産党の場合、いかにも主導権を握っているかの印象を受けるが、それが即大多数の人民からの支持を得ていたとは言えない。運動自体リーズナブルなものではなく、いつも無垢の人民を巻き込んで非合法的破壊活動を繰り返すというゲリラ闘争であった。

ロ・李昊宰氏の場合

同氏は、高麗大学の国際政治学教授である。

戦争を先にやったのは北朝鮮だと明言しつつも、北進統一を叫びアメリカに対して対韓軍事援助強化を求めて来た李承晩にもその責任の一端があり、また、朝鮮半島における軍事力均衡に先んじて北朝鮮に軍事援助を行い、金日成

の後押しをし、南進を許したソ連には金日成の侵略を助長した責任があるとも指摘している。喧嘩両成敗だという意見であるが、これは戦争の原因論あるいは動機についての指摘ではなく、結果から逆に原因を探るという方法とっているが、理にかなった方法とは思われない。

#### ハ・蠟山芳郎氏の場合

「一九五〇年三月来頻発する韓国軍の三八度線での攻撃に脅威を感じた北朝鮮軍は、一九五〇年六月二五日の未明総反攻に出て三八度線を越えて韓国内に進撃した。アメリカ政府は直ちにこれに応じて国連に提訴した<sup>(14,2)</sup>。」

迂回的表現であるが、過去の『日本の良識』を代表する学者や識者の大方の見方であろう。三八度線付近での小競り合いがあったことは認められるが、北朝鮮に対して脅威を与えるほどの規模ものではなかった。後で見ると、金日成は、この三月事件に際して、スターリンの許可さえあれば一挙に韓国軍を敗北に追い込んで三日以内にソウル入城を果たす、と自信の程を仄めかしている。

### 三 朝鮮戦争に至るまでの経緯

——ソ連外務省保管の秘密文書(以下、暗号文書と称す)にもとづき——

朝鮮戦争が不意打ちであったかどうかは重要な命題である。これを解く鍵がこの暗号文書にある。それを見ると、金日成がスターリンに内戦の意を表明して朝鮮戦争の裁可を得ようと必死になっている様子が窺われる。

米軍撤退後の当時の南朝鮮は空白状態のまま、軍備も十分になく社会的には左翼の破壊活動に悩まされており、経済は破綻した病める国家であった。このような国が相手ならば容易に叩けると読んだ金日成は、スターリンに対して短期決戦で片付くと大言壮語するが、なかなか聞き入れて貰えない。

やがてスターリンが承知し、毛沢東を含めた三者間の、朝鮮戦争発生までの謀議の様子について、暗号文書はつぎの順序で教えている。

その主なリストを拾い上げ、ここに紹介する。

◎一九四九年一月一九日…『二月一七日の金日成の朴憲永との面談』<sup>(143)</sup>内容について駐朝ソ連大使スチコフ（シュチコフとも）のソ連外務省への報告書

◎一九四九年一月二四日…『スチコフ、モロトフ宛に『二月三日金・朴との会談』内容報告

◎一九四九年一月二七日…『スチコフ『三八度線地域の状況について』モロトフへの報告書

◎一九四九年二月三日…『スチコフ『三八度線の防衛状態について』のモロトフへの報告書

◎一九四九年二月四日…『スチコフ、モロトフへの報告書…南朝鮮の警察と軍人を乗せた六台のトラックが二月三日に三八度線を越えて来た事件に関連した東海（日本海）海岸での事件に突いての報告書。（なお、同事件は北への帰順事件と主張するが、ある種の拉致事件であった模様…筆者）』

◎一九四九年二月九日…スチコフがモロトフ宛に送った報告書『元山に戦闘飛行軍団を配置せよ』というソ連邦武装力（国防）司令部の指示に関連する内容のもの

◎一九四九年二月二四日…モロトフが平壤のスチコフに対する電訓

『二月三日の電文の南朝鮮の防御状態についてソ連政府が北朝鮮政府代表団との協議に反対しない旨を、朴憲永外相に伝えるよ  
うにとの指示

○一九四九年三月五日…北朝鮮内閣代表、金日成を始めとする北朝鮮政府要人とスターリンとの会談。

○一九四九年三月一日…モロトフ、スターリンへの報告書、二三月五日金日成がスターリンとの会談を終えてスターリンに対し  
て『ソ連政府に対する要望書』なるものを提出し(秘密厳守のため日付なし)、これに対してソ連政府から具体的に応答する形  
式の文書。その正式な文書名は『朝鮮問題委員会の朝鮮に提供する設備資材及び軍備に関する支払いに充当させるため、ソ連政  
府が北朝鮮政府に借款を供与する件に関して(朝鮮問題委員会)』となっている。なお、これに先立ってソ連政府は北朝鮮政府  
に四九年二月一六日にウラジウオストークからライフル弾二、三〇〇、〇〇〇発、テテ弾三、二〇〇、〇〇〇発、八二ミリ地雷一五、  
〇〇〇発、小銃一五〇〇丁、IPS(?)一、二〇〇、軽機関銃四〇〇丁、重機関銃一〇〇丁、八二ミリ迫撃砲四〇機などを輸  
送している。輸送経路はバクラニツナヤから豆満鉄道(陸路)、ポシエト湾への海路輸送はカルホースニク号を要請している。

○一九四九年四月一七日…グロムイコ外務次官、スチコフに対して『予定された南朝鮮における米軍撤退についてモスクワの知ら  
された情報の裏付け』を速やかに行うように命令伝達

○一九四九年四月二〇日…バシリイエフスキ、シュテメンコの北朝鮮のソ連軍事顧問、スターリンに対して三度目の『三八度線の  
状態』を報告

○一九四九年四月二二日…ソ連外務部、スチコフに『南朝鮮におけるアメリカ軍の引き上げ状況に対するアメリカ国内での世論に  
関する情報を送る

○一九四九年五月一日…スチコフ、スターリンへの電文『人民軍のために一九四九年四月二八日に金日成がスターリンに送った書  
簡書内容及び補充兵力の申請書』を盛り込んだ内容

○一九四九年五月一五日…スチコフ、五月一四日の金日成との面談した内容を盛り込んだ内容電文をヴィシンスキーに送る

○一九四九年五月二二日…スチコフ、ソ連外務部に電文を送る。『五月九日ソウルで開催された特別記者会見の席で南朝鮮国防長



官申性謨と外務部長官林炳稷の声明文及び李承晩大統領の米軍引き上げに対する同意案について』

◎一九四九年六月四日…グロムイコ、スチコフへの電文『一九四九年に朝鮮に武装力、戦闘力、軍事技術などの施設を配置する問題について』メンシユコフ、シュテメンコの両軍事顧問が金日成のためにスチコフとゴロピンに送った電文内容を伝達するため。武器提供、その一覧表をスチコフが本国政府に伝達（六月四日から同月一〇日まで）

◎一九四九年六月二二日…『北朝鮮人民軍構成と戦闘能力の潜在力について』の電文をスチコフがヴィシンスキーに送る

◎一九四九年六月二八日…スチコフ、ヴィシンスキーへ電文『六月二五日から同月二八日間の祖国統一民主主義戦線（民族統一戦線のことを指す…筆者）創立大会の結果について』。ちなみに、これは北朝鮮の開戦へのレゾン・デートルを知ろうえで大変役に立つ。

◎一九四九年七月二日…スチコフ、ヴィシンスキーへの電文『朝鮮からアメリカ軍の引き上げに関連して清津港にソ連の海軍基地を造ること及び平壤にあるソ連軍空軍基地の長期駐屯に関して』。なお、ソ連政府及び北朝鮮政府は、これまで一九四八年二月二六日までソ連軍は北朝鮮から完全に撤退しているのに、南朝鮮から米軍が出て行かないのは韓国を植民地化している何よりの証拠だ、と大きく宣伝した。

◎一九四九年七月一三日…スチコフ、ヴィシンスキーに電文『三八度線地域状況に関する情報』の提供』

◎一九四九年八月三日…グロムイコ、スチコフへの電文『北朝鮮に対し、南朝鮮への侵攻に際して有利な状況づくりについて意見の開陳』文書

◎一九四九年九月一五日…スチコフ、スターリンに対して『朝鮮半島状況に関する報告書』を提出

◎一九五〇年一月六日…スチコフ、ヴィシンスキーへの電文『一九四九年十二月二九日、一九五〇年度の武装力、戦闘などの朝鮮に配置する問題について、北朝鮮大使に送られた金日成の書簡内容』を伝達

◎一九五〇年一月一九日…一月一七日に北朝鮮外務部で行われた会談で開陳された金日成の開戦に関する情報

◎一九五〇年一月三〇日…スターリン、スチコフへの電令『開戦に際した金日成の構想を直に聞くべく会談にスターリンが参加す

る用意があることを(金日成に)伝えるようにとの命令内容』

◎一九五〇年二月七日…スチコフ、ヴィシンスキーへ電文『二月四日のスチコフと金日成間の会談内容について』

◎一九五〇年三月九日…スチコフ、ヴィシンスキーに電文『一九五〇年度の人民軍のための武装力戦闘力技術施設を朝鮮に配置する費用の支払いに関する北朝鮮大使の名義での金日成書簡内容』の伝達

◎一九五〇年三月二十四日…スチコフ、ヴィシンスキーへの電文『開戦のためのスターリンとの直談判のために金日成と朴憲永がモスクワへ向かう予定あり』の内容

◎一九五〇年四月一〇日…金日成の密命を帯びた駐中朝鮮大使・李周淵、毛沢東と会談し、金日成の意中を明かす。これに対して毛沢東、金日成との会見の用意あり、統一問題(南侵)に関して具体的計画あれば会見は非公式にすべし、さもなくば公式日程を組み行うべし、と答え、第三次大戦に備え朝鮮も軍隊を持つべし、と強調。

◎一九五〇年五月一二日…スチコフ、ヴィシンスキーへの電文『李周淵大使の毛沢東との会談内容について(朝鮮側から)通報の会ったことを伝え、毛沢東の『平和的に朝鮮を統一することは不可能』との見解をも伝える。金日成は五月一三日に中国に向かい、この問題について毛沢東との会見の用意あり、なお朴憲永も同伴。』

◎一九五〇年五月一三日…駐中ソ連大使・ロシチン、スターリンに報告『毛沢東対金・朴会談が五月一三日に予定通り行わる。このとき毛沢東同志との対話で『朝鮮同志は現状は過去とは違っている、北朝鮮は行動に移せる、この問題は朝中間ので密に検討すべし』、とのスターリン同志の意向を伝える。』このとき、毛沢東は『実際に開戦ありや』と訝しい表情を呈し、スターリン同志からの指示を待ち侘びている様子。』

◎一九五〇年五月一四日…これに対するスターリンからの、毛沢東への返事『この問題(開戦)については朝鮮側とは検討済み、このとき金日成には『これは中国側と共同で検討すべき事項であるが、中国がこれに同意しなければ新たに検討があるまで問題決定は先延ばしにすべし、との条件をつけたことを明らかにする。』

一九五〇年六月二五日の開戦準備状況を以上のように見た。

金日成の開戦の真実の理由は、韓国地域を自己の支配下に治めるといふ野望達成にあり、それを遂行することによってスターリンの良き子分としての地位獲得にあった。ソ連にしてもバルト三国の例のように、朝鮮半島を強圧的に支配下に治め血なまぐさい闘争を展開すれば国際社会からの批判の覚悟しなければならぬが、金日成が自前でやってくれるというのであるから、正に渡りに船であった。ソ連がやったという朝鮮における『民主基地の建設』にしてもそうである。権力の最高位にはソ連大使を据え、その下に内閣首相を置き、内政・外政にわたって大使がスターリン代わってこれを監督していればいいのである。事実、ソ連の大使・スチコフは、朝鮮におけるスターリンであったし、民主基地建設とは衛星国家の構築を意味するものであって、金日成の自由意思でなし得たものは何一つなく、法令や政令にしてもソ連式内容によったものであった。共産主義国家特有のはったりは、とりわけ北朝鮮の場合、極東地域において、特に日本では実に効果的に作動していた。

五〇年代から六〇年代にかけての日本は、資本主義体制下の自由主義国家とは思えないような、社会主義甚だしくは共産主義思想に毒づかれた社会であった。マルクスのいう科学的社会主義国家とは縁のない北朝鮮のことを、地上でもっとも発展した社会主義優等国ないし地上楽園と誉めそやしていたが、その実北朝鮮は九八年北朝鮮の憲法が言うとおり、最初から『もっとも優越した金日成主義国家』であったわけである。

#### 四 開戦への状況づくり

##### イ. モスクワ会談への道

これは、上記の年表、一九四九年三月五日の記事に関連する。

モスクワ会談の目的は、スターリンから開戦の裁可を貰うための予備会談の開催にあり、二つ目には金日成は自己の政敵・朴憲永に対してスターリンの口から「お前は第二人者だ」と言って貰うことにあった。しかも朴も金日成に同伴して、自分が二番目でもいいが、いつ第一人者にしてくれるのか、を知りたかったようである。というのは、朴は、過去の経歴から見て自分こそ第一人者であるとの自負心があったし、素朴な意味で指導者選びの場合、金日成は、第一に朝鮮の独立運動の経歴の面で不十分、次に伝説的人物・金日成にあやかった金誠柱こと金日成（金日成研究家のなかには徐大粛氏のように彼の活動経歴を評価する者もいる）はスターリンの張り子の虎であった、最後に従って、かれはソ連のかいらいとしての存在でしかない、という見る向があつて、ソ連派、中共派そして国内民族主義陣営からはかれを指導者にすることに異論を挟む者が多くいた。

今度のモスクワ行きは、それらの声をはねのけてのものであった。一九四九年早々金と朴の両人は、訪ソの旨をスチコフ大使に伝え、同大使はそれをスターリンに申し入れている。折よくスターリンからは快諾の知らせがあつた。

同年二月三日、スチコフはこの両人に一枚のメモランダムを手渡す。それには、モスクワ訪問時の朝鮮代表団がソ

連首脳部をの会談に際して質問事項をまとめたもので、そのメモ以外の話も質問もしてはならない、と念を押される。

「同志モロトフへ」

二月三日金日成首相と朴憲永外相が本職と会ったときモスクワ訪問時に朝鮮政府が協議したいと念願している諸問題についての次の内容のメモを手渡ししました。

(メモ) 朝鮮民主主義人民共和国は、ソ連政府と次の問題について協議することを希望する。

一 経済協力、貿易、文化交流の拡大と技術援助に関する協定の締結について

二 一九四九年から一九五〇年までの貿易協定について

共和国経済の迅速なる復旧と経済強化のために朝鮮政府は輸送・工業・通信その他に必要な設備・機械部品などの援助を希望する。

その代わりに朝鮮民主主義人民共和国政府はソ連に鉄鋼・非鉄金属及び化学工業製品を提供する。

三 技術援助について

- ① ソ連人専門家の朝鮮への派遣
- ② 基幹産業施設及び建設に対する技術指導
- ③ 地下資源の調査発見のための取り組み
- ④ 朝鮮人専門家のソ連への研修派遣することについて

#### 四 文化及び教育について

- ① ソ連入学者を朝鮮の大学へ派遣することについて
- ② 朝鮮人大学生をソ連へ留学させることについて
- ③ ソ連出版物の提供及び文化人と教育者の相互間を通じた朝鮮文化・教育機関に対する支援について

#### 五 朝鮮に対する借款の供与について

大規模な復興事業と人民軍兵器に要する支出のために朝鮮民主主義人民共和国政府は総額三百万ドルの借款をソ連政府に要請する。これで朝鮮はソ連から産業施設と兵器装備及び弾薬を購入する、朝鮮政府は一九五一年から三年以内に債務を償還する用意がある。

#### 六 阿吾地―クラスキノ間の鉄道建設について

#### 七 朝ソ間定期航空路を運行するための『朝ソ航空株式会社』の設立について

代表団については、以上の通り。

金日成 (代表団長 首相 北朝鮮労働党党员)

朴憲永 (副首相兼外務相 南朝鮮労働党党员)

洪命憲 (副首相 民族独立党党首 南朝鮮労働党党员)

鄭準沢 (国家計画会委員長 北朝鮮労働党党员)

一九四九年二月三日

張時雨（商業相 北朝鮮労働党党員）

この外に五人の実務者を同行させる予定。予定の代表団構成には、政府に参加している南朝鮮側の中道派派遣政党、北側の民主党・青友党は含まれておりません。南側の中道派人士らは、政府では教育相には白南雲、国家経済部長には李勇、また北朝鮮民主党から民族保衛相には崔庸健が、青友党からは逋信相に金東周が担っています。金日成は北朝鮮の既存政党の代表をも加えたいと言って来ましたが、代表団がむやみに膨らむだけで意味がないと、いつてこれをやめさせました。金日成は、朝鮮側にあつては、上記の政党の一部代表も代表団構成に含めたい考えでしたが、この場合、代表団が大きくなり過ぎる危惧を感じた点を暗示しました。私見ですが、代表団構成には教育相の白南雲、逋信相の金東周を追加包含させた方が政治的に妥当と思います。代表団構成と訪問に関するこれらの準備とモスクワへの出発時間に対する指示してください。

四九年二月四日 スチコフ<sup>(15)</sup>

この文章から窺えることは北朝鮮政府の代表団選定に対するスチコフの気配りである。筆者の知る範囲内でこれらの数人の紹介をして置きたい。

先にも述べて置いたように、解放に至るまでの朝鮮共産党の歴史から見れば、朴憲永こそ本流であり、金日成は亜流である。ソ連もそのことを承知していた模様で、アメリカに先立って北朝鮮地域に進駐したときなどは、金日成の組織名を『朝鮮共産党北朝鮮分局』と名乗らせていた。これは不用な紛糾を避けたいというソ連軍政の思惑と、北朝

鮮国内情勢が安定するまでの金日成の我慢比べとが功を奏してなされた一方策に過ぎなかった。事実朴憲永は朝鮮共産党を代表する人物であった。しかし、解放後米軍政に対して挑戦とも思えるような過激な闘争を繰り広げ、揚げ句南朝鮮地域における合法的な政治活動は禁止され、また米軍政からは逮捕状が出ていた。極左冒険主義者に転落してしまつたかれ、霊柩車に身を委ね、最後に選択して求めたのは理想を実現すべく北朝鮮の地であった。当時朴憲永を支えていたのは、国内共産主義の流れに与する南朝鮮労働党出身者であったが、国内に基礎勢力を持たなかつた金日成はこれを無視することができなかつた。つぎに洪命熹なる人物、かれは本来ジャーナリストである。また、白南雲の場合は、東京の一橋大学出身の経済学者。かれはマルクスの科学的社会主義的な立場から朝鮮社会を史的唯物論に沿って朝鮮社会を歴史的に分析し、昭和八年に『朝鮮社会経済史(改造社)』を発売している。その後帰国してソウルの地において、延禧専門(延世大学の前身)の教授となるが、解放後には政治運動に参加し、自ら新民党なる政党を創り党首となつた。朴憲永や呂運亨の勤労人民党などの左派政党が米軍政から壊滅打撃を受け、三党が合同して南朝鮮労働党を結成したとき、これに参加するが、間もなく北朝鮮に渡り教育相を務めた。

最後に張時雨なる人物は、筆者の目をひく。

彼は、金日成から命じられるまま金日成のライバルを暗殺する任務を負っていた。金日成にとって最も厄介であつたのは玄俊赫であつたが、彼は北朝鮮唯一の共産主義理論家で、過去に京城帝国大学では三宅鹿之助の薫陶を受けた思想家でもあつた。その彼を張時雨は金日成の指図とソ連軍政の指示を受けて白昼堂々と殺害し、ソ連軍政のロマネンコ少将からその功を称えられて勲章を授かつた、その後政府の要人にまで申し上がるという軽佻浮薄な人物で



あった。ところが災難は思わぬ所から降りかかるもので、彼は酒席で玄俊赫暗殺のことをうっかり喋ったために金日成の刺客に殺害された。いずれにしても、波乱含みの人事であったことには変わりなく、数年後の血なまぐさい政変劇を示唆しているようであった。

#### ロ・三八線付近の状況

北朝鮮のことに触れる前に、この当時韓国の国内政治状況について若干触れると、一九四九年一月一五日にアメリカ政府は韓国に駐屯中の米軍兵力を削減することに決定し、米第二四師団の兵力を七五〇〇名規模の第五連隊のみを残し完全に引き上げることを発表した。また、同年の二月八日にはローヤル米陸軍長官が来韓し、李承晩大統領との間でそれに関して具体的な協議を行っていた。引き続き同年三月二二日には米国家安全保障会議 (National Security Council: NSC)、国務省、陸軍省など三者間で『韓国に関するアメリカの基本的立場』という評価報告書をまとめ、トルーマン大統領に提出し、一九四九年の完全撤退を建議した。この脈絡に沿ってアチソン国務長官の極東地域における前哨防衛線が発表されるが、韓国に対する曖昧な決定が金日成の野望の火に油を注ぐ結果となるのである。その結果戦争を誘発することになるが、ジョージ・ケナンはそれをアメリカの『挑戦と対応に対する毀誉褒貶』だと称した。

つまり、アメリカが韓国を投げ出すなら投げ出すで干渉をしなければ良いが、そこへ共産主義集団に侵略されることになる、アメリカは『ある種の法律家的姿勢にたって、実際の自己よりも慈しみ深く賢明でかつ高貴な自己と信

じ込ませ、アグレッシヴに介入してくる。』ことになるのである。<sup>(16)</sup>

これに対してソ連は朝鮮半島状況を冷静に分析していた。

特に朝鮮半島に衛星国家を築き上げるのにはどうすればいいかという点に絞って、ソ連は実にリアルな分析から始める。まず、韓国にはどれだけの兵器があるかであった。彼らも韓国には日本軍が残っていた九九式三八式の小銃の外少量のマシンガン、実戦に役立たない迫撃砲、練習用の飛行機数機、軍隊も警察を合わせて一〇万そこそこ、これならやれる、という計算があったに相違ない。結果、ソ連は北朝鮮に対して戦争に備えた大量の武器装備などの援助を急いで行ったものと推量されるが、モロトフの書簡に前半部にあった『三〇〇万ドルの借款要請』の件も戦端を切り開く嚆矢となったの言うまでもない。

『モロトフ同志へ』

三八線の状況は、穏やかではありません。

南朝鮮警察と軍部隊は、毎日越境、北朝鮮の警察歩哨所を攻めています。

三八線は日本製小銃で武装された北朝鮮警察二旅団が警備に当たっております。

弾丸にいたっては銃あたり三発から一〇発、自動火器は皆無、これにより南からの不慮の攻撃があれば、退却のほかに術はなく、終局には北朝鮮警察官が生け捕りになることもしばしば起きております。

以上の状況に鑑み、ソ連政府は、上記二旅団への武装が配当されることによりそれ武装力省の指示により沿海州

の軍管区にこれらの装備がくることになったことから本官は何度も早期発送を催促しましたが効果がありません。  
貴下の緊急介入を要請します。

四九、一一、三 スチコフ<sup>(17)</sup>』

また、東海地方（日本海）にも、南北の軍警察間で小競り合いが起きた。江原道襄陽地方では南が勝ち、北が退却して、北の領域の一部が南軍に占領され、北朝鮮側は死亡八人、負傷三人を出している、とスチコフは報告した。緊急事態に備えて、早く次の武器を送って欲しい、といている。

武装・重機関銃（1） 自動銃及び小銃（20） 軽装・重機関銃（1）

この日に東海岸付近で大規模な揉め合いが発生した。北朝鮮内務省からの報告を受け、次のように述べている。

『(1)二月三日九時、東海岸の自動車道路をつたわって南の軍警は六台のトラックに乗り三八線を越えたが、北はこれを追い出した(2)東方面から一〇時から一六時の間に三五台に分譲して南の軍警が北の領域の四キロ以内まで侵入一八時までおりました。この地域に所在する北朝鮮警察の派出所は北方に後退した、中略 北朝鮮領土に対する攻撃の事例が頻繁になるにつれ、二月五日内務省からの発表の予定、これは南側がわざと危機を造成して『だからアメリカ軍が南に駐屯する必要がある』と、不安状況づくりをしている点を指摘するつもりです。』

一九四九年二月三日 スチコフ<sup>(18)</sup>』

ここを見る限り、軍事情勢が韓国に有利に展開されているように見える。

しかし、その実、スチコフの北朝鮮への早い時期のソ連の軍事援助の状況作りのための工作であったし、その念願が叶って以下のような大量の兵器が北朝鮮の届けられるのである。

『貴下の要請に依えて、ウラジウオストクで船便で五屯(?)の次のような数量の武器弾薬を発送した。

小銃弾 二、三〇〇、〇〇〇 八二ミリ地雷 一五、〇〇〇 TT弾薬 三、二〇〇、〇〇〇 小銃 一、五〇〇

I P S (2) 一、二〇〇 軽機関銃 四〇〇 82ミリ迎撃砲 四〇 重機関銃 一〇〇 船積期日 四九・

二・七 積下場所 清津港。受領の準備されたし、残余物品は、二通りの方式で発送の予定。

(1) パクラニツナヤから豆満江への鉄道經由…この運送は、武装力総参謀本部の許可があつてこそ実行可能

(2) ポシエトマンへの海上輸送…このために極東艦隊 船舶総局に北洋から接近中の汽船カルホズニク号をて供す

るよう要請しており、合わせて砕氷船でポシエトマンへの入港を確保す。モスクワの支援がなければ、この汽船は、提供されない模様。  
 ビリュエゾフ 一九四九・二・四<sup>(19)</sup>

ほぼこれと同時の二月九日には、ソ連空軍太平洋艦隊・政治部担当副司令官のセルピン少将が平壤を訪問している。

訪問の目的は、元山に駐屯していたソ連空軍連隊が引き上げ後の、北朝鮮の後使用状況を視察することと同時に北朝鮮に対して防衛上同地に一個連隊の空軍の配置の必要性を説くためでもあつた。

セルビン少将は、重大な発言をしている。

まず、北朝鮮が一度引き上げたソ連空軍を再度引き戻すことは（北朝鮮はそれを望んでいるが）、政治的に見て得策ではない、つぎに『南朝鮮政府が近い将来北朝鮮を攻め入るなどの如何なる行動も取らない、なぜならば三八線での挑発行為について言えば、北朝鮮にはそれを撃退できる状態にあるから』<sup>(21)</sup>と、言っている。

ハ・モスクワでの朝ソ会談

同年の二月四日はスチコフ大使から『北朝鮮政府のソ連政府への要望書』にたいするソ連政府からの返事は届いた。モロトフからスチコフへの暗号電文である。

「ソ連政府は、先般の文書に例挙された下記の問題に関し、朝鮮政府代表団と協議することに反対しない旨を朴憲永に伝えてほしい。一、経済協力及び貿易拡大に関する協定締結。二、一九四九年―五〇年の貿易協定締結に関して。三、技術協力について。四、文化・教育分野での協力について。五、阿吾地―クラスキノ間の鉄道建設について。六、朝ソ航空株式会社設立について……代表団の中に白南雲教育相、金東周通信相を含める案に賛成です、我が方の意見ですが、朝鮮代表団のモスクワ訪問の時期は、二月末か三月初めの方が良いと思います。朝鮮側の意向を知らせてください。」  
モロトフ<sup>(21)</sup>

もちろんソ連の衛星国家・北朝鮮がソ連の意向に異存を挟む余地はなく、すべてソ連側の筋書き通りの運びとなっ

て、北朝鮮政府が準備にとりかかった。一九四九年三月五日に念願のスターリンに『謁見』することになる。朝鮮側の日程の都合のためか、それともスターリンの夜行性によるものか分からないが、会談が実行されたのは、同日夜の八時であった。ここに出席したメンバーは、次の通り。

〈ソ連側〉

〈朝鮮側〉

スターリン

金日成

ア・ヤ ヴイシンスキ

朴憲永 洪命憲 鄭準沢

テ・エフ スチコフ

張時雨 白南雲 金東周

金・イ・エム(ソ連側通訳)

駐ソ大使 朱寧夏

朝鮮側通訳 文一

スターリン(以下スタ)・・旅は疲れなかったか

金日成(以下金)・・(ソ連政府に対して謝意を述べて)無事でした

スタ・・交通の便は、鉄道かそれとも航空便か

金・・鉄道でございます

スタ・・道中で病気をした者はなかったか

金・・全員極めて健康です

スタ・・さて本題に入ることでしょう。なにか提案したいことはないか

金…ソ連軍隊が朝鮮を解放し、ソビエト政府とソビエト軍は経済発展の事業において、そして朝鮮の民主主義的発展事業において朝鮮に援助してくれ、朝鮮政府としてはソビエト連邦の爾後の経済文化及び援助無くして朝鮮が民族経済と文化を復旧発展させることは至極困難であり、また朝鮮の経済と文化をこれからもっと発展させるためにソビエト連邦の援助が必要です。

スターリンからどのような援助が必要か、と聞かれた金日成、『経済と文化援助』と答える。具体的に何かと言われた金日成は、『人民復興経済発展二年計画を定めた（人民経済復興一カ年計画、の意味…筆者）、この計画を遂行し、経済的基盤を強化させるためには、ソ連の経済援助が必要だ、工業、通信及び輸送その他人民経済部門のために機械類、施設及び部品などが必要それにソ連専門家の朝鮮への派遣、新しい施設（工場などの）の建設設計、地質研究調査の実施などの技術援助も必要だ』と応えている。

スタ…例えば、どんな施設か

金…目下建設中の安州の灌漑施設、これには専門家が不足しており、また清津製鉄所の復旧及び完工、水豊水力発電所の修理などです。

スタ…北朝鮮には鉄鉱石はたくさんあるか

金…はい、たくさんあります

スタ…支援も可能、専門家派遣も可能だ。

朝鮮への援助は有償。話題の中の鉄鉱石のことは、後で問題になるが、ソ連の極東地域での鉄鋼生産に必要な原資

材を朝鮮から得たかった。ますます調子に乗る金日成は『いままで両国の交易は成功的に行われて来た、これからの二カ年計画のためにソ連邦より設備、蒸気機関車、電気機関車、石油工業用部品及び設備を輸入する必要があるが、朝鮮の輸出入のバランスが合わず、ソ連の期待に応えることができないので、ソ連政府からの借款が必要だ』と申し入れている。

スタ…承知した、その規模は？

金…四・五〇〇〇万ドルの範囲で……

話はまとまった。さらに援助の話が続く。

金…両国の経済交流を盛んにし、輸送の便宜強化のために、阿吾地—クラスキノ間の鉄道建設が必要であります

スタ…それはどこのことだ？ その鉄道の長さは延べでどのくらいか

スチコフ(以下スチ)…この鉄道は、ソ連領のクラスキノから朝鮮領の阿吾地まで建設され、全長五八キロですが、

その内一〇キロは朝鮮領、四八キロがソ連領に建設されることになります。

スタ…考えて置きましょう、その外に何か

金…朝・ソ間の航空路線の開通が必要であり、また朝鮮には輸送用の航空機や朝鮮人飛行士が皆無の状態です

スタ…朝鮮にロシアの飛行機がないのか

金…ソ連軍撤収以後、ソ連航空部隊と飛行機は残っていません。目下朝鮮では自分の飛行士を養成中にあります

スタ…朝鮮に飛行機はあるのか



スチ…航空教育連隊が一個あり、訓練用と戦闘用の飛行機はありましても、輸送用の飛行機はありません  
スタ…現在何機あるか

スチ…戦闘用が四八機、訓練用が一九機あります

スタ…ソ連よりましじゃ。ソ連は配属飛行機数を減らしているのが現状だ、ほかに何か。

金日成は、ソ連との文化交流の必要性、例えば朝鮮の大学で勤務するソ連学者の派遣の問題、朝鮮学生とのソ連への留学、実習のために朝鮮の専門家のソ連への派遣、ソ連教育プログラムや図書を朝鮮に送ること、文化人、芸術人の交流などを挙げた。朝鮮にはロシア語学習施設が組織されたこと、だからソ連から教員の派遣の必要なことなどを強調した。スターリンは、経済借款のことを提案し、金日成もこれに賛成。簡単にまとめ、規模は五〇〇万ドル、償還時期は一九五一年から一九五四年までとし、スターリンは金日成から『自動車、繊維産業設備、蒸気機関車、石油など今年中に欲しい』と言われるが、準備期間が必要なので不可能だと返答、借利率子は年に二%とするも、事情によっては一%もありうる、また自動車も飛行機も与えることができるかと約束する。これで経済援助の話は終わる。

つぎは戦争につながる物騒な話である。

スタ…南朝鮮にはどれくらいの米軍がいるか

金…二万名ほどです

スチ…一万五〇〇〇から二万くらいですかね

スタ…南朝鮮には民族軍隊がいるか

金…六万名ほどいます。

スタ…正規軍かそれとも警察も含めてか

金…正規軍だけです

スタ…(悪戯っぽく)こわいか

金…とんでもありません、しかし海上戦闘単位を持ちたいと思います

スタ…どっちが強いか、北か南か

朴憲永…北が強いです

スタ…清津やその他の場所には日本人が残した造船所があるのか

金…ありません

スチ…あっても小さな船を造る程度の……

スタ…これも助けてあげられる、朝鮮は飛行機を持つ必要もある。南朝鮮軍隊の中にフラクション(共産党細胞組

織)をもっているか。

朴…持っていますが、自分の正体を隠しております

スタ…全くだ。正体を見せる必要はまったくない。南も同じことをしているので、注意することだ。

(こんな指示があって話題が三八線付近での事態発生の件に移る。)

スタ…三八線でどんなことが発生したか。報告では南の人間が侵入して来て、北朝鮮の領内の数箇所を襲撃したり

して占領するとの話だが、事実か

金：南からの侵入の可能性を考え、対抗措置を講じております。……江原道内の地域で南朝鮮軍隊との衝突があっても、北朝鮮の正規軍が着くまでに退却しました。

スタ：追いついたのか、それとも自退したのか

金：当然戦闘の結果であり、北朝鮮領土からかれらを放り投げてやりました

スタ：北に軍事学校はあるか

金：あります

スタ：飛行士養成学校は

スチ：戦闘訓練航空連隊が一個あります

このときスターリンは、前に朝鮮代表がモスクワを訪問したことを思い出して、朴憲永に向かって、朴憲永に向かって、目だね、と声をかける。朴はこれにこたえる。スターリンは金日成と朴憲永に対して、顔色もよく、昔と変わっていない、いいことだ、といって話題を変える。

スタ：朝鮮の綿花は、どこから手に入れているか

金：ソ連から得たいと思っております。去年は三〇〇〇トンもらいました。

スタ：朝鮮からもらおうと思っていたのに、あべこべだね。ところで、北朝鮮は他の国との、たとえば日本、中国、フィリピンなどと貿易関係があるのか。

金…中国くらいですが、まだ中国は戦争中であり、そのためにかれらとは正規の貿易をやることができせん  
スタ…そのほかの国とは

金…ありません。香港と非公式的で散発的です。

スタ…朝鮮には、商社のようなものがあるか。

金…ええ、主に香港、ダリシニ(大連)そして中国との交易をおこなっております

スタ…かような会社をもつ必要はある。持って悪いことはなく、民族ブルジョアジはあるもので、ブルジョアジのなかにもよい人もいるもので、かれらを助けてやって貿易をし、品物を買入れくるように放置しておきなさい。そんなことは、悪いことではない。余はこれで終わる。

(ヴィシンスキ同志には質問はないか、と尋ねるが当のヴィシンスキ、ないとこたえる。朝鮮の代表団一同、スターリンに対して謝意を表す。対話継続時間…一時間一五分。記録者…スチコフ同志及び通訳金 イ・エム<sup>(22)</sup>)

この会談の終了後金日成からスターリンに対する予定通りの『ソ連政府への要望書』が提出される。秘密を期したためか、この文書は手書きとなっており、日付も記していない。朝鮮戦争の口火を切る大事な資料となるので、ここに紹介しておく。正式タイトルは、『スターリン同志と解決するための金日成の質問事項』、となっている。

〔1〕 祖国の統一の方途及び方法について…武力行使で統一を実施しようとする雰囲気

(2) 経済問題…一、朝鮮人民経済の発展展望について、いかなる計画を、どのくらいの期間で? 二年か三年かそれとも五年間で作成するのか? 計画において南朝鮮をどのように考慮すべきか。二、朝鮮鉄道の電鉄化に

ついて。三、今後の工業用設備、自動車、トラクターを輸入することに対して。四、朝鮮の農業の今後発展について。五、ソ連専門家らに対して（補充要請）。六、職場研修のために朝鮮労働者らをソ連に派遣することに関して（電線、電動機、一般技術製品などを生産する新技術習得が目的）

(3) 中・朝関係…一、毛沢東との会見に対して。二、中国との条約に対して。三、中国居住の朝鮮人及び朝鮮居住の中国人に対して

- (4) アジア共産党及び労働党情報局（ビュロー）に関して
- (5) 海運株式会社の協約の再検討に関して

（清津工場港Ⅱの返還要請が主内容）

署名<sup>(23)</sup>

ここだけ読む限り開戦の意思を開陳したことにはならない。しかし、『祖国統一方法について』の『武力統一を実現させる環境』及び『中朝関係』の毛沢東との会見について、である。次のモロトフのスターリンへの要望事項を見れば、なんのための毛沢東との会見が必要であったかが間もなく分かるのである。

「スターリン同志へ」

朝鮮問題委員会は、朝鮮に提供する設備、機資材及び軍用資産に対する補償のために、ソビエト連邦が朝鮮民主主義人民共和国に借款を供与するに関するソ・朝政府間の協定案を用意しました。案を添付します。

検討を要請します。一九四九年三月一日

ベ・モロトフ

写本配付 ベリヤ マレンコフ ミコヤン カガノヴィッチ ブルガーニン コスイギン同志へ」<sup>(24)</sup>

このことがあって、朝ソ間で設備、機資材、軍用資産に対する補償について、さらに朝鮮がソ連に借款を与えるための政府間の協定が結ばれる。

## 五 戦争の準備

### イ. 海軍基地の設置

四九年三月一日ソ連最高会議の政治議事録によれば、北朝鮮への戦争に要する機資材の運び入れが決定的になった。と、同時にかれらは借款に関する取り決めも忘れることはなく、商売もしっかりやっている。そのタイトルは、朝鮮に提供する設備機資材及び軍用資産に対する補償のために、ソビエト連邦が朝鮮民主主義人民共和国に借款を供与することに関するソ連と朝鮮民主主義人民共和国政府間の協定』、と長ったらしい。

『ソビエト社会主義共和国連邦政府が設備、機資材及び軍用資産を朝鮮に提供し、その補償のために借款を供与することに同意することに関連して、両政府は次のように合意した。

第一条 ソ連政府は、本協定により施行される物資供給の補償のために総額百万ルーブルの借款を朝鮮民主主義人民共和国政府に供与して、この借款を一九四九年七月一日から一九五二年七月一日まで毎年同金額に分けて運用する。

第二条 本協定の第一条に明記された朝鮮民主主義人民共和国政府に供与された借款は、一九五二年七月一日から三年間毎年均等方式で償還される。

第三条 朝鮮民主主義人民共和国政府は、本協定第一条に明記された借款に対して半期別に加算される年利二%の利子をソ連政府に支払う。

第四条 借款償還と利子支払いは、朝鮮民主主義人民共和国政府は、鉄鋼及び非鉄金属、化学製品その他の物品などのソ連物資をソ連政府に供給する方式で施行される。両側の合意に基づいて、借款償還は金をもって当てられる。借款償還のために、ソ連政府に供給される物資の品目、数量及び価格は、供給施行年の以前の三カ月以内に双方がこれを協議する。物資価格が時価価格即ち該当商品の主要市場の価格を勘案して策定される。

第五条 本協定第一条に基づいてソ連政府は、一九四九年七月一日から一九五二年七月一日に至る期間を毎年均等違方式で総額百万ルーブルの設備機資材及び軍用資産を朝鮮民主主義人民共和国政府に供給し、その条件はC I F朝鮮港又は満・朝国境の鉄道駅での貨車で譲渡するものとする。物資供給の品目、数量、価格、その他条件は両側の協議に従って決定する。

第六条 本協定に策定された会計処理を目的に、ソ連国立銀行と北朝鮮中央銀行は、相互に特別口座を開設する。該当銀行は、本協定に従った会計及び口座運用の手続きを共同で定める。

第七条 朝鮮民主主義人民共和国政府に対しては、本協定第一条に明記された借款をソビエト社会主義共和国連邦政府に物資供給の方式又は双方合意に従って金をもって満期前に償還できる権利が付与される。

第八条 本協定は、署名した日から効力を有する。

一九四九年ロシア語と朝鮮語本の二部をモスクワで作成されたのであり、二部共同効力を有する。

ソビエト社会主義共和国連邦

朝鮮民主主義人民共和国政府の

政府の全権により

全権により<sup>(25)</sup>

つぎにソ連海軍の軍港を北朝鮮領内に設けるといふ話になる。

これは国際法に違反する行為である。アメリカがこの時点で南朝鮮から撤退しおり、ソ連政府も対外にはすでに撤退している、と声明を出していた。アメリカ軍が南朝鮮から撤退を急いだのも、このようなソ連側の措置に対してとった行動であった。場所といい、タイミングといい、絶妙である。

清津といえ、日本もかつて重要視したほどの良港であって、日本にたいして睨みが効く。そのタイトル『清津港にソ連軍の臨時残留の関する議定書』となっている、当然朝鮮とソ連が内証にやった条約である。

『一九四九年三月一八日付 決定 一四―朝鮮に関して

次の事項を決定する。



一 ソビエト海軍力部隊の清津港での臨時残留に関するソ・朝議定書（別添No 1）

二 ポロシユロフシと平壤間の定期航空便開通に関するソ連民間航空総管理局と朝鮮民主主義人民共和国交通省間の協定（別添No 2）

三 プリモルスカヤ鉄道クラスキノ駅から北朝鮮鉄道阿吾地までの鉄道敷設に関するソ連政府と朝鮮民主主義人民共和国政府間の協定（別添No 3）

四 ソ・朝海運会社『モルトランス及び石油加工会社VNO設立に関する協定の再締結及び部分的変更に関するソ連閣僚会議決定（別添No 4）

五 朝鮮専門家らのソ連での技術研修条件に関するソ連政府と朝鮮民主主義人民共和国政府間の協定（別添No 5）

六 朝鮮駐在ソ連貿易代表部設置に関する覚書  
中央委員会 書記<sup>(26)</sup>

ここに挙げるものだけでも、三月初旬のスターリンとの会談結果がどうなったかがよく判ろう。一は、きな臭い話であり、二と三は鉄道を連結することによってソ・朝間の紐帯を強化せしめる効果満点のものであり、四は火力の合理的利用に関する取り決めであり、これが戦争の全過程を通じて如何に近代的な戦争遂行が可能になるかということ、五と六はバーター貿易の典型を作り上げる基礎的過程での取り決めの話である。それにソ連が清津港に海軍を停泊させるための理由づけが振るっている。『南朝鮮に米軍が実在している点に鑑み』（米軍の韓国からの引き上げは決定的

であった（筆者）ソ連は北朝鮮に海軍を入れるのだそうだ。また、ソ連海軍が清津港に停泊するのは、当然の権利であり、北朝鮮はその提供の義務があるというが、実際の取り決めの内容をここに紹介しておく。

「議定書」

第一条 ソビエト社会主義共和国連邦政府（以下ソ連邦政府）は、朝鮮民主主義人民共和国政府（以下、朝鮮政府）の要請を受けいれて、南朝鮮に米軍が現存している点を勘案し、自国の海軍力部隊を清津港に残留させることとし、上記海軍部隊の維持に関連するすべての費用もソ連政府が負担するものとする。

第二条 朝鮮民主主義人民共和国政府は、上記海軍部隊の駐留に所要する清津港の港湾設備と建物をソ連政府の書簡にて供する義務を負うものとする

第三条 朝鮮政府は、清津港に駐留する海軍部隊のためにソ連により調達する貨物及びソ連へ発送するこの部隊の所有の貨物に対して、通関検査及び関税を免除することに同意する。

海軍部隊に勤務するソ連国民は、両方の合意の手続きにしたがってソ連の管掌する機関が交付する文書によってソ連から朝鮮へ、朝鮮からソ連へと国境を越えるであろう。

ソ連邦の政府の全権により

朝鮮政府の全権により

モスクワ

一九四九年三月

日

確認署名

フェオクジストフ<sup>(27)</sup>

念のために確認しておく、以前に朝鮮問題を合理的に解決するために米ソ共同委員会が作られたが、ソ連側の陰謀や北朝鮮系の南朝鮮の策動家らの蠢動により、有名無実に崩壊されたのは、一九四九年五月六日であった。この時ソ連代表のスチコフは、南朝鮮優位の朝鮮問題解決に不満を表明し、両国の会議の決裂をアメリカ側に告げてソウルを離れている。その後には、南北円卓会議の話が持ち上がり、韓国内の中道派及び左派ではその作業に取り組んでいた。米ソはその会議に先立って軍隊の撤収を決め、アメリカは軍事顧問の五〇〇名だけを韓国に残して全員撤退していた。だから確かにソ連軍も四八年九月に北朝鮮政府が樹立より同年の十二月二六日までに完全に撤退していたはずであった。しかし、この事実をど解釈したらいいのか。北朝鮮の正史には、『朝鮮の解放者としての役割を果たしたソ連軍は、一九四八年まで北朝鮮から完全撤退……』<sup>(28)</sup>と記し、海軍駐屯の事実を完全に隠蔽している。北朝鮮政府は、一九四九年にソ連からの経済援助のあったことは、事実として発表している。スターリンから得た一時金二億一二〇〇万ルーブルで『四九年から五〇年の人民経済計画』を採択し、二カ年経済計画を完遂した、と発表している。<sup>(29)</sup>

ロ・三八線付近の軍事状況について——ソ連軍顧問からの報告——

以下の文書は、朝鮮駐屯のソ連軍の顧問バシリエフスキとシュテメンコの手書きによる報告書である。

「スターリン同志へ」

三八度線朝鮮状況に関する資料を報告します。

北朝鮮から我が軍の撤収以来、三八度線での南側の侵犯行為は挑発的であり、体系的な性格を帯びております。

最近一カ月間でこのような侵犯行為の頻度は増えました。今年の一月一日から四月一五日にいたる期間に三八度線付近では侵犯事例全部で三七件、その中二四件は三月一五日から四月一五日の期間で起きました。その性格を見れば、侵犯行為は一中隊ないし一大隊の警察警備部隊で、小銃、機関銃及び迫撃砲の発砲を伴う衝突であり、南側部隊が三八度線を越境したりもします。すべての侵犯事例にあつて、発砲は南側が始めております。三八線の状況が悪化され、同時に南側軍隊の三八線への集中が継続しております。南側が今までよりもっと大きな兵力を投入して北朝鮮正規軍隊に対して新しい挑発を犯す場合も排除できません。これを考慮して、南側よりも大規模な挑発行為に備えるために適切な措置を取るよう北朝鮮正規軍隊の司令部に勧告した方がいいように思われます。

バシリイェフスキ（署名） シュテメンコ（署名） 一九四九年四月二〇日<sup>(30)</sup>

よく分析している。

この時期にこんな小競り合いがあつし、南側からの挑発も事実であろう。しかし、これが即朝鮮半島状況を変えさせるほど深刻な状況をもたらすものではなく、あくまで小競り合いである。これは金日成にとって戦争遂行への好材料を提供することになるも、四九年四月現在、金日成が戦争したがっていることを中国は知らない。しかし、知ったところで、内戦中の中国が朝鮮を助けることもできなかったし、手を貸すほど中国には余裕はなかった。それに気づいていたがどうか別に金日成は同年五月までは中国の毛沢東のところへ使者を出さなかった。それを『開戦までス

ターリンにのみ顔を向け、ソ連と作戦計画を相談し、ソ連から武器装備の援助を受け、すべて人民部隊にロシア人顧問を置いて居た……<sup>(31)</sup>』と中国筋は言っているが、お門違いである。

つぎの文書を見ることにするが、これは、スチコフ大使がスターリンに送った暗号電文である。

「同志スターリンへ

同志宛の本官への北朝鮮の内閣首相・金日成の書簡を送ります。

『ソ連閣僚会議議長　スターリン同志へ

尊敬するスターリン同志！

朝鮮情勢の変化に関連して、朝鮮人民軍の強化と技術装備が至極必要であります。スターリン同志、貴下が組織対策に関連する、我が追加的要請を受け入れて下さることを希望します。機械化軍及び航空部隊を除外して、その他軍部隊の追加編成は一九四九年五月に完成の予定であり、航空部隊は九月に完了する予定です。

深い尊敬を表して

朝鮮民主主義人民共和国

内閣首相

金日成

一九四九年四月二八日』

この書簡には、朝鮮人民軍のための追加武器弾薬に対する申請書が添付されております。同志の指示に従って本職は機械化連合部隊、航空師団及び数個の砲兵部隊を編制する事に関して金日成と相談しました。その結果、金日成と朴憲永は、下記部隊を編成することに決定しました。

(1) 機械化旅団一…その構成は各々三三三台の戦車を保有する戦車連隊二、スー七六、一六ずつを装備した自走砲兵大隊、砲兵大隊、戦闘—対戦車砲兵大隊、機械化射撃連隊、オートバイ大隊及び付属支援部隊。この旅団編成は、今年五月に完了すること。(2) 三三三台戦車を保有し、元山に配置される独立戦車連隊。(3) 戦車搭乗要員の訓練用の独立部隊としての戦車訓練連隊を維持する。(4) 各砲兵師団内にスー76自走砲兵大隊を編成する。(5) ジスー3砲種を保有する軍砲兵連隊を編成する。(6) 軍工兵大隊を要請する。(7) 各四三機を保有する戦闘爆撃機連隊及び戦闘機連隊として構成された混合航空師団を編成する。要員養成のために航空訓練連隊を別途に維持する。航空師団の編成は、九月に施行の予定。目下飛行中隊の編成、教育と訓練が行われています。指揮官の補充に困難があります。しかし、九月までは航空師団編成に所要する指揮要員を確保する可能性があります。戦車及び砲兵部隊の編成のためには、主に現存砲兵部隊との戦車訓練連隊から抜擢する方式で要員をおおかた確保することができます。上記に言及した措置などを遂行するために、また高射砲部隊と海岸守備部隊を改善するための、現在一六、〇〇〇名規模の志願者を募集しております。この専門別添申請書と金日成がブルガーニン同志宛に出した申請書に従ってソビエト連邦が受け付けるべき武器に対する補償のために、朝鮮人民は現有の国家備蓄中三〇、〇〇〇トンの米を捻出しました。朝鮮人民は、不足分につき、今年九—一〇月ころに捻出の予定です。

スターリン同志! 別添の申請書により朝鮮政府の武器供給の要請を受け入れて下さいますよう、貴下に要請します。書簡と申請書原本は、定期パウチ便で送ります。

ハ・ソ連の北朝鮮への軍事援助の実況

筆者の言う『危機醸成』とは、金日成に言わせれば『朝鮮情勢の変化』であり、当然それに即応する朝鮮人民軍の兵器・装備・ソ連がらの軍事技術の援助が緊急に要されることになる。金日成が戦争をやる気がなければ、『機械化軍』や『航空部隊』の編成や超近代的戦争につながる武器の要請がなぜ必要があろうか。

時に一九四九年五月一日、スチコフ大使は本国政府に対して次のような品目を要請し、本国政府から承諾されている。

「 申 請 書

朝鮮民主主義人民共和国の武装のために

一連 番号	名 称	単 位	数 量	一連 番号	名 称	単 位	数 量
1	飛行機イルー10	機	三〇	2	飛行機ウイルー10	機	六
3	飛行機ヤクー9	機	三〇	4	飛行機ウヤクー9	機	六
5	ウトウー2ウヤクー9	機	二四	6	フォー二	機	四
7	装甲車バー64	台	五七	8	戦車テー34	台	八七
9	自走砲スー76	門	一〇二	10	装甲輸送車	台	一〇
11	移動緊急治療所A型	台	二二	12	移動緊急治療所B型	台	一一
13	トラクター	台	一一	14	サイドカーオートバイ	台	一一二二
15	七、六二mm小銃	丁	二五、〇〇〇	16	七、六二mm狙撃小銃	丁	一、〇〇〇

朝鮮戦争の起源についての一考察(二)

同志社法学 五二巻四号

九五(一〇九三)

17	七、六二mmカービン小銃	丁	八、〇〇〇
19	四五mm対戦車砲	門	四八
21	一二〇mm砲	門	一八
23	双眼鏡	個	二、〇〇〇
25	測量用羅針盤	個	一三四
27	高射砲射撃指揮装置	セット	三
29	ペーイ望遠鏡	個	九
31	砲台鏡検査器	セット	二
33	測量用羅針盤検査器	セット	二
35	七、六一mm小銃弾薬	発	二五〇〇万
37	七、六一mmリボルバー弾薬	発	三〇万
39	四五mm砲弾	発	六〇、〇〇〇
41	七六ジスー3用砲弾	発	二五、〇〇〇
43	八五mmテール34戦車用砲弾	発	六九、五〇〇
45	一二、七弾薬	発	三一六、〇〇〇
47	爆弾フアブー15	発	七二〇
49	爆弾ペタフー二、五一一、五	発	二五、二〇〇
51	パラシュート	個	五二〇

18	七、六二mmテテ拳銃	丁	七、〇〇〇
20	七六ジスー3	門	三七
22	ヘルメット	個	六〇、〇〇〇
24	砲台鏡	個	一一二
26	羅針盤	個	三、二五一
28	距離測定器一、五m	個	六
30	双眼鏡検査器	セット	二
32	距離測定器四m	個	三
34	砲兵用拡大分度器検査器	セット	二
36	七、六一mmテテ弾薬	発	二〇〇万
38	七、六一mm中小銃弾薬	発	一七五万
40	七五mm27年型砲弾	発	四、〇〇〇
42	八二mm地雷	個	一一八、〇〇〇
44	二三mm砲弾	発	二二六、〇〇〇
46	爆弾フアブー100	発	七二〇
48	爆弾アオー10	発	一〇、八〇〇
50	ステオルM(火砲用機械油)	トン	五



申請書

朝鮮人民軍工兵用機材の消耗数量

一連 番号	名 称	単 位	数 量	一連 番号	名 称	単 位	数 量
1	浮橋機材NLP (輸送車を含む)	台	六	2	水陸両用艇	隻	六
3	ア-3艇	隻	一二	4	上陸用開閉可能な艇デ・エス・エル	隻	一二
5	低風艇 エル・エム・エヌ	隻	二〇	6	ベ・エム・カ (快速艇)	隻	六
7	浮橋機材エヌ二ペ	セット	一	8	ア・エス-1	台	六
9	ア・エス-3	台	二	10	爆破機ベ・エム-1	台	六〇
11	爆破機ベ・エム-2	台	六〇	12	ムーブ	台	五〇、〇〇〇
13	エム・ベ-5	個	五〇、〇〇〇	14	タート-8	個	一〇〇、〇〇〇
15	工兵用 電線	m	五〇、〇〇〇	16	爆破セット-68	個	六〇
17	技術機材No 68	個	二五	18	爆破用機材用指令板	個	二〇
19	地雷探索機	個	一七〇	20	各種錠前	個	一五〇
21	テ・エム-41	個	三〇、〇〇〇	22	テ・エム・ツエーベ	個	三、〇〇〇
23	フォームズ-2	個	三〇、〇〇〇	24	火薬 (四〇〇g、二〇〇g、七〇g入り爆筒)	トン	四〇
25	大麻製? (導火線)	m	三、〇〇〇	26	カ・ペ (指令所用照明器)	台	五〇
27	中型グライダー	台	三	28	小型グライダー	台	三
29	鉄製ローラー	台	三	30	曳引装置ニシ	台	二
31	地面用鋤ニシ	台	三	32	伐採機	台	三
33	バックカー	台	二	34	レター	台	二

朝鮮戦争の起源についての一考察 (一)

同志社法学 五二巻四号

九七 (一〇九五)

申請書

朝鮮人民軍のための通信装備所要数量

No	名称	単位	数量	No	名称	単位	数量
1	無線機ラーフ	セット	二	2	無線機エル・エス・ベール自動	セット	五
3	無線機エル・ベール半自動	セット	一六七	4	無線機エル・ベール	セット	一五〇
5	無線機エル・ベール・エム	セット	一四	6	無線機アール7	セット	二一
7	無線機ラムー3	セット	一	8	無線機エル・パ・エル	セット	一
9	無線機防衛測定器ペ・カ・ベール45	セット	七	10	レーダー	セット	二
11	受信機ウースー3エス	セット	一〇	12	受信機ウースー4エス	セット	八
13	ラジオ中断所ルーク自動式	セット	一	14	充電式一、五エスー3	セット	二三
15	充電式一、五エスー6	セット	四	16	モーターエルー6	セット	四
17	波状測定器カ・ベール4	セット	五	18	ステレオグラフィックセット	セット	二
19	電信機エス・テ35	セット	六	20	蓄電池イ・カ・エヌー60	セット	一〇〇
21	電信機塔ー43	セット	七四一	22	電信機タイ	セット	九
35	リパー	台	五	36	掘削機	台	五
37	掘削機	台	五	38	有刺鉄線	トン	二〇〇
39	鉄線切断用ハサミ	個	二〇〇	40	ベルト式揚水機	台	六
41	ポプラ式泉	台	六	42	地層掘削機セット七八、七九m	台	二
43	地層穿引機	台	六				

23	交換機ペ・カー10	セット	二	24	電信所ペ・カー20	セット	二
25	交換機シャー60	セット	二	26	スイス製交換機	セット	九
27	電話用単線電線	km	一、六〇二	28	電話用複線電線	km	二一〇〇
29	電話線	km	二〇〇	30	ギア電動式コイル	個	二、二三〇
31	盗聴用タトパイプ		六	32	無線機修理車	セット	四
33	装置アスカー33	セット	一〇	34	電信用ニプル	個	一一
35	石英波状測定器、キャリブレーター	個	一七	36	規格化の工具セット	セット	二二
37	カバンカ・テ288	セット	二〇	38	カバンカ・テ289	セット	二二
39	ボルトアンペアメーター計	個	一九八	40	変圧器ピカ	個	一〇
41	無線機セベル	セット	六	42	電話機ウナーピ	セット	六〇

予備部品

一、テ一三四型 戦車用部品

二、イルー10 ヤクー18、ウイルー10 ウヤクー9 フォー2 飛行機用部品

確認 署名 四九・五・二<sup>(33)</sup>

(これらの申請書に対する返事がきた。ちなみに、物資の受け渡しは、金日成ではなく、駐在ソ連大使・スチコフとソ連貿易代表のコロビンとなっている。つぎの文面に注意されたい。)

「 四九年六月四日

平壤——ソ連大使

メンシユコフ顧問の電文をシュベシエンコが伝える

上将 スチコフへ

ソ連貿易代表 ゴロビンへ

金日成に対して、彼の要請に相応してソビエト政府は、朝鮮に一九四九年に次の装備、弾薬、軍用機器などの提供に同意したことを伝えて欲しい。

※ 空軍機材

品目	単位	数量	品目	単位	数量
飛行機イルー10	機	三〇	飛行機ウイルー10	機	四
飛行機ヤクー9	機	三〇	飛行機ヤクー11	機	六
飛行機ヤクー18	機	二四	飛行機フォート2	機	四
予備エンジン アムー42	台	六	パラシュート	個	二五〇
予備部品総額	千ルーブル	三五〇、〇			

※ 装甲―電車―機材

品目	単位	数量	品目	単位	数量
戦車T―34	台	八七	自走砲スー76	台	一〇二
装甲車バー64	台	五七	サイドカーM―72	台	一一二
予備部品総額	千ルーブル	二〇〇、〇			

※ 砲兵装備

品目	単位	数量	品目	単位	数量
七、六二mm小銃	丁	一〇、〇〇〇	七、六二mm狙撃小銃	丁	一、〇〇〇
七、六二mmカービン小銃	丁	四、〇〇〇	四五mm対戦車砲	門	四八
七六mm砲ジス	門	七三	一二二mm砲	門	一八

※ 計測器

品目	単位	数量	品目	単位	数量
プ・ア・ゾー3	セット	三	距離測定器四m基本	個	三
距離測定器一m基本	個	一二	砲台鏡	個	二二
測量用羅針盤	個	一三四	羅針盤	個	三、二五一
双眼鏡	個	二、〇〇〇	望遠鏡	セット	九
双眼鏡用検査器具	セット	二	測量用羅針盤検査器具	セット	二
後方兵用拡大分度器検査器	セット	二	ステオルM／火砲用機械油	トン	五

※ 弾薬

品目	単位	数量	品目	単位	数量
七、六二mm小銃用弾薬	千個	一一、〇〇〇	七、六二mm重弾丸	千個	一、七五〇
四五mm砲弾	千個	三〇	七六mm27年型砲用砲弾	千個	四
七六mmジスー3用砲弾	千個	二三	八二mm地雷	千個	七八、五
八五mm戦車ター34用砲弾	千個	一六、五	一二、七mm弾丸	千個	一五〇、〇

二三mm砲弾 千個 一〇〇、〇  
 ファブ榴散投下弾100—爆弾 個 七二〇

※ 計測器

品目	単位	数量	品目	単位	数量
プアゾー3	セット	三	距離測定器4m基本	個	三
距離測定器1m基本	セット	一二	砲台鏡	個	一二
測量用羅針盤	個	一三四	双眼鏡	個	二、〇〇〇
望遠鏡ビ	セット	九	双眼鏡検査器具	セット	二
砲台鏡用検査器具	セット	二	後方兵用拡大分度器検査器具	セット	二
ステオルM火砲用機械油	トン	五			

※ 弾薬

品目	単位	数量	品目	単位	数量
七、六二mm小銃用弾薬	千個	一一、〇〇〇	七、六二mm重弾丸	千個	一、七五〇
四五mm砲弾	千個	三〇	七六mm27年型砲用砲弾	千個	四
七六mmジスー3用砲弾	千個	二三	八二mm地雷	千個	七八・五
八五mm戦車ター34用砲弾	千個	一六・五	一二、七mm弾丸	千個	一五〇・〇
二三mm砲弾	千個	一〇〇・〇	ファブ(榴散投下弾) — 100爆弾	千個	七二〇・〇
アオー10砲弾	個	一〇、八〇〇	ペタブ二・五—一・五(対戦車爆弾)	個	二五、二〇〇

※ 牽引車両

品目	単位	数量	品目	単位	数量
八五mm高射砲(ジスー151)用牽引車	台	一二	七六mm砲兵大隊火砲(ガスー63)用牽引車	台	三六
三七mm高射砲(ガスー63)用牽引車	台	二四			
※ 工兵用機材					
渡河用エヌ・エル・ペ(浮橋)	台	三	A-3艇	台	一二
上陸用折り畳み式艇(デセエル)	台	一二	小型ゴムボート(エル・エム・エヌ)	台	二〇
快速艇(BMK)	台	五	渡河用艇エヌ二ペ	台	一
ア・エスー1	台	六	ア・エスー3	台	二
爆破機ベ・エルー1	台	六〇	爆破機ベ・エルー2	台	六〇
ムブ	千個	五〇	エムペー5	千個	五〇
タトー8	千個	五〇	工兵用電線	m	五〇、〇〇〇
爆破セットNo 68	個	六〇	工兵用資材No 68	個	二五
爆破機用操作板	個	二〇	地雷探知機	台	一七〇
各種銃前	個	一五〇	対戦車地雷テ・エム・テー・ペ	個	三〇、〇〇〇
フォームズー二	個	三〇、〇〇〇	爆薬(四〇〇g、二二〇〇g、七五g包装)	トン	二〇
大麻導火線	m	三、〇〇〇	カペ(指令所)用照明器	台	一〇
金属製ローラー	台	三	金属製打坑器	台	五
鉄線切断用ハサミ	個	二〇〇	ベルトコンベヤー式揚水機	台	六
井戸用小口パイプポンプ	台	六	井戸掘削用機械セット78/79	台	一

※ 通信機材

品目	単位	数量	品目	単位	数量
無線機ラフ固定式	台	一	無線機エルエスベ固定式	台	一〇
無線機エル・ベ・エム	台	一七九	無線機A-7-A	台	四六
無線機13-エル	台	一五	無線機セベル	台	一六
受信機	台	二五	充電器1.5エス-3	台	一〇
充電器エル-6	台	四	電信機エステ35	台	四
モース電信機	台	二一	蓄電器5-エヌ・カ・エヌ-60	セット	一〇〇
電信機タイ-41	個	七四一	交換機ペカー10	個	五四
交換機ペカー30	個	二	スイス式交換機	個	九
単線電話線	km	八〇〇	電信用電線	km	一〇〇
歯車式リール	個	一、六〇〇	電線接続管	個	一、六〇〇
石英波状測定器グリゴカペ-4	個	二二	靴・カテ-288	個	一〇
靴・カテ-289	個	二五	ポルトアンペア-メートル計	個	一九八
ピカ式変圧器	個	一〇〇	電話機ウナピ	個	六〇

※ 海軍用機材

品目	単位	数量	品目	単位	数量
各二個の45-36-N型魚雷を装着した	台	五	駆逐艇(中古)	台	三
12シリーズゲ-5型魚雷艇中古	台	五			



対潜爆弾及び砲弾二セットずつを装着

した122ア設計の潜水型駆逐艇(中古)

鋼鉄製帽子

台 一  
個 六〇、〇〇〇

その他装備

以上

ソビエト政府は、米とその他朝鮮商品との効果として武器及び軍用機器を朝鮮に提供する一九四九年三月一七日付の、ソ連と朝鮮民主主義人民共和国間の交易及び支払いに関する協定の付属議定書を朝鮮政府とともに署名するようソ連対外貿易省に委任したことを金日成に通知しなさい。上記の議定案は、ソビエト政府によって確認されたので、これを案として朝鮮人民に伝達してもよいのです。

《一九四九年三月一七日付のソビエト連邦と朝鮮民主主義人民共和国間の交易及び支払いに関する協定書の拡大》  
ソビエト連邦政府が武装と軍用武器を朝鮮に提供するに関する朝鮮民主主義人民共和国政府の要請の受け入れに關連して、また一九四九年三月一七日付けの《ソビエト連邦と朝鮮民主主義人民共和国間の交易及び支払いに関する協定》第三条に基き双方は次のように合意した。

1 ソビエト連邦政府は、一九四九年朝鮮民主主義人民共和国政府に本議定書に添付された名单に従って装備及び軍用機器を提供する。

2 朝鮮民主主義人民共和国政府は、一九四九年ソビエト連邦政府に対して、装備及び軍用機器の価格を相殺する朝鮮物資を提供するが、精米三万トンは、一九四九年一〇月一日までに提供する。朝鮮に提供される装備及び軍

用機器の金額を補償するために、ソビエト連邦に供給されるべき残余の朝鮮商品の名単は両側により一九四九年一〇月一日まで合意することにする。

3 本議定書に従う相互物資の提供に関する価格及び条件については、ソビエト貿易主管機関と朝鮮側の関係機関との合意に基づいて決定される。

一九四九年にモスクワでロシア語及び朝鮮語で二部作成され、ここに両協定は同一の効力を有する。

ソビエト社会主義共和国連邦

朝鮮民主主義人民共和国政府の

政府の全権委任により

全権委任により

モスクワでの議定書への署名のために、朝鮮政府がだれを任命するか問い合わせなさい。 打電乞う

署名

署名

エム・メンシユコフ

エス・シュテメンコ

グロムイコ(署名)<sup>(34)</sup>

(1) 朝鮮戦争 饗庭孝典NHK取材班 日本放送出版協会 三六―三七頁。

(2) 今日の朝鮮 金三奎 河出書房 四九―五〇頁

(3-1) 朝鮮戦争 神谷不二 中公文庫 四六―四七頁

(3-2) 平和と危機の構造 高坂正堯 (NHK出版) 三三頁及び五五頁

(4) 朝鮮人民の正義の祖国解放戦争 朝鮮民主主義人民共和国科学院 歴史研究所編纂 朝鮮外国文出版社 平壤 二八―二

- (5) 現代朝鮮論 畑田・藤島編 五四頁 ただし、(朝鮮戦争の勃発 信夫清三郎 福村出版より転載)
- (6) 饗庭孝典 前掲書 三九〜四〇頁
- (7) (6)と同所
- (8) 月刊朝鮮 一九九八年一月号 二〇九頁
- (9) (8)と同所、及び韓国現代史 崔章集編著 ソウル・ヨルウム社 参照
- (10) 北鮮の十年 坪江杣二——金日成独裁政権の実態——日刊労働通信社 四二頁
- (11) 朝鮮民主主義人民共和国 主要法令集 鄭慶謨・崔達坤編 張君三訳 東京 日本加除出版株式会社 参照 及び 北韓法特殊研究——北韓法律文献目録の分析とその解題——高麗大学教授 崔達坤及び高麗大学副教授 申榮鎬ソウル・セチャン出版。また、北韓法令集 全五巻 ソウル 大陸出版など
- (12) Bruce Cummings: Korea's place in the Sun — A modern History P. 289 W. W Norton & Company
- (13) 饗庭孝典 前掲書 四三頁
- (14-1) (13)と同所及び韓国外交政策の理想と現実 二四九頁 ソウル 法文社
- (14-2) 蟬山芳郎 国際問題 岩波小辞典 第二版 岩波書店 一三六頁
- (14-3) 共和国の初代の副首相兼外相。南朝鮮労働党の党首であったが、米軍政の弾圧から逃れて北朝鮮に渡った。ナンバー2として問題なく内・外政をこなしているかのような印象を受けていたが、五三年には戦争責任を問われ裁判にかけられ、国家や民族に対する反逆罪で死刑財産没収に処され、南朝鮮労働党関係者らの処刑のあと、五六年には最高軍事法定の死刑執行された。五六年とされる。
- (15) ソ連外務省外交文書保管所 暗号文書(以下暗号文書) 一九四九年二月三日 平壤のスチコフからモロトフへ。なお通信相の金東周の場合、『金廷柱』の間違いで、かれは金日成の部下でソ連派に属していた(坪江杣二前掲書 五四頁)
- (16) George Kennan: America Diplomacy of The Acheson Doctrine の項参照 — The Chicago University Press
- (17) (15)と同所の後半部分

朝鮮戦争の起源についての一考察(一)

- (18) 暗号文書 一九四九年二月四日 スチコフからモロトフへ
- (19) 暗号文書 一九四九年二月九日 スチコフからモロトフへ
- (20) (19)と同所
- (21) 暗号文書 平壤大使 スチコフへ 一九四九年二月一四日文末にモロトフの署名あり(手書き文)
- (22) 暗号文書…イ・ベ スターリン同志が金日成首相を団長した朝鮮民主主義人民共和国政府代表団と交わした対話
- (23) 暗号文書…スターリン同志と解決するための金日成の質問事項
- (24) ソビエト連邦共産党政治局 議事録No 07 FILE 285 スターリン同志へ、ベ・モロトフ
- (25) 暗号文書…朝鮮に提供される設備・機材及び軍用資産に対する補償のためソ連が朝鮮に借款供与に関するソ連政府と朝鮮政府間の協定
- (26) 暗号文書…全連邦(ポリシエビキ)中央委員会No: 68/14 一九四九年三月 モロトフ、ミコヤン、ヴィシンスキー、メンシュコフ同志らに 一九四四年 部 中央委員会政治局 会議記事録No 68より抜粋
- (27) 政治局記事録No 68 第一四項(特別ファイル)非公開 極秘
- (28) 朝鮮民主主義人民共和国科学院 前掲書 一二頁
- (29) 朝鮮現代史 金三奎 筑摩書房 五四頁
- (30) バシリイエフスキ及びシュテメンコ同志よりスターリンへの報告書(手書き) 一九四九・六・二〇
- (31) 毛沢東の朝鮮戦争 朱建榮 岩波書店 六八頁
- (32) 暗号文書…一九四八・五・一 スチコフからスターリンへの報告
- (33) 暗号文書…一九四九年五・一 発信人 スチコフ
- (34) 暗号文書…平壤のソ連大使へ 一九四九・六・四 発信人 エム・メンシュコフ及び シュテメンコ